研究区分	教員特別研究推進　教育推進

研　究 テーマ	視機能の維持と健康寿命の延伸を可能とするアイケアの確立				
研究組織	代　表　者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	三沢　萌伽
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発　表　者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	三沢　萌伽

講演題目

大学生の眼の症状とアイケアの現状　―アイケアの方法の検討を目指して―

研究の目的、成果及び今後の展望

【研究の目的と概要】

文部科学省の令和 4 年度学校保健統計において、裸眼視力 1.0 未満の割合は、小学生、中学生、高校生で 7 年間最高となった。また、COVID-19 パンデミック前の 2017～2019 年の老視発症年齢は 36.5 歳であったが、2020 年は 25.5 歳に低下したという老視進行の報告もある（Ayaki et al., 2022)。ICT と DX の急速な普及に伴うデジタル機器の長時間使用が影響しているとされているが、デジタル機器の使用を減らすのは困難で、むしろ生活必需品で使用頻度は増加傾向にある。そのため、発症予防や改善のために日常的な眼のケアとして「アイケア」が必要なのは自明の理である。しかし、目に不自由や不安を感じているにもかかわらず、普段から健康維持・病気予防に努めている人は少なく、高度な視機能障害に陥ると自立機能は大きく制限され健康寿命を短縮させる（日本眼科啓発会議, 2021)。有効なアイケアは確立されておらず、アイケアの方法と効果の検証を行い、エビデンスを確立させ、アイケアの意義を見出し普及させていくことが課題と考える。本研究の目的は、アイケアの方法と効果を検証し、視機能の維持と健康寿命の延伸を可能とするアイケアを確立することである。

令和 6 年度は、まず大学生を対象として、眼の自覚症状と他覚的所見、デジタル機器使用状況、眼の健康への関心、眼のケアの実施の有無と方法を明らかにすることとした。

【成果及び今後の展望】

眼の症状とアイケアの現状を把握するための質問紙を作成した。質問項目は、眼の自覚症状、デジタル機器使用状況、眼の健康への関心、眼のケアの実施の有無と方法、眼科の受診歴とした。また、眼瞼・結膜・角膜の観察をするための細隙灯顕微鏡の選定を行った。細隙灯顕微鏡は 3 社検討し、それぞれの業者からデモ機を借用し操作性を比較した。また、有用性と安全性について、臨床研究や基礎研究で十分な検証がなされているかも含め検討した。検討の結果、株式会社 OUI Smart Eye Camera を選定した。外部光源を使用せず、重量も軽く額当てもついているため安定した撮影が可能であった。先行研究では、眼瞼結膜の乳頭評価に関する一致度は κ=0.83（n=34)、眼球結膜の充血評価に関する一致度は κ=0.89（n=34）と一致度が高く、ドライアイ所見の相関係数は角膜染色スコア（CFS)；r=0.92、涙液層破壊時間（TFBUT）;r=0.89（n=106）であった。

次年度は、研究協力者を募集し、本研究に着手する。